

Art Laboratory Hashimoto Annual Report 2021 2021.04-2022.03

10年間
ありがとう
そして
これから

アートラボはしもと

〒252-0207
相模原市中央区矢部新町3-15 青少年学習センター内
[交通案内]
JR横浜線矢部駅下車 徒歩3分
JR横浜線相模原駅または小田急線相模大野駅から
バス「矢部駅入口」下車徒歩10分

令和4年10月発行

■編集・発行

アートラボはしもと(相模原市市民局文化振興課)

(令和3年度)

所長 松島政幸

学芸員 加藤慶/柳川雅史(再任用)

美術専門員 越智波留香/富田さゆり/入江彩美

(令和4年度)

所長 松島政幸

学芸員 加藤慶

美術専門員 柳川雅史/越智波留香/富田さゆり/入江彩美

■撮影

仁禮敏朗

(表紙、p.1、p.3(1、3、4)、p.4(5、8、9、11、14)、p.5(8)、

p.8(1、2、7、8)、p.9(1)、p.11、背景画像(p.2-3・5-8・11・17))

■お問い合わせ

TEL.042-703-4654 FAX.042-703-4659

E-mail artlabo@city.sagamihara.kanagawa.jp

URL <http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp>

■印刷・デザイン

株式会社日相印刷





アートラボはしもとは、周辺にある美術系大学などと連携し、そこで学ぶ美大生や卒業生、子どもたちや地域の方々、商店街や企業、学校、研究機関、市民グループなどと協力しながら、さまざまなアート事業を展開する「アートの活動拠点」です。このたび施設を再整備するため、一時閉館することとなりました。令和3年9月からは、市立青少年学習センター内に仮事務所を置き、再整備の準備とともにアウトリーチを中心とした事業を行っています。

アトリウム

アートラボはしもとの10年目

アートラボはしもとは、再整備に伴う準備のため、令和3年7月に開催したプログラム「アートラボはしもと改装閉館イベント～これからはじまるリニューアルラボ～」をもって一時閉館することとなりました。

当館はこれまで10年にわたり、美術施設整備のための暫定施設として、さまざまな機関や団体などと協働・連携し、その活動を館内のみならず、学校や地域のイベントなどにも広げるなど、試行的な事業を幅広く展開してきました。特に、近隣の美術系大学（女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学）とは事業に係る基本協定を結んでいたため、学生たちは準備に時間をかけた主体的な実践を繰り返すことができました。これは学生の経験値の向上だけでなく、事業運営のあり方を考えるうえでも大変有意義なことでした。

モデルルームがそのまま残るマンション販売センターという、ほかには類を見ない施設であったことも、活動の拡張性を高める要因の一つであったと考えられます。これにより、形式や制約にとらわれない自由な発想が生まれ、さらに現場での対話と試作を繰り返すことで瞬発力や応用力が培われました。こうして独自性のあるプログラムが多数実施されましたが、「SUPER OPEN STUDIO(以下S.O.S.)」のように、地域に広がる取り組みにまで発展したものもあります。

このように当館は、後継施設の方向性を定めながら活動を進めてきたところですが、いよいよ再整備に着手することとなり、令和4年3月、当館と民間施設が併設する複合施設の整備を行うための民間事業者を公募しました。（当館の再整備計画については、p.11をご参照ください）

後継施設においても、これまでの経験や知識・技術のみならず、その精神性をも継承していきたいと考えています。新しい「アートラボはしもと」にご期待いただき、ぜひ、楽しい想像を膨らませてください。



活動方針

- 1 アートによるワークショップなどを通じて幅広い世代の市民が美術を体験する場を施設内にとどまらず市内の各地に展開します。
- 2 様々な主体との協働や異分野との連携を進め、アートを通じたコミュニティの形成やまちの賑わいづくりを推進します。
- 3 地域の若手アーティストを支援するとともに美大生に活動の場を提供し、アートに関わる人材を育成します。

アートラボはしもと 改装閉館イベント

～これから始まるリニューアル～

会期 令和3年7月30日(金)～8月9日(月・振休)
 会場 アートラボはしもと
 主催 アートラボはしもと(相模原市)
 協力 Super Open Studio NETWORK、
 公益社団法人相模原・町田大学地域コンソーシアム、
 相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら実行委員会、
 無印良品 小田急町田
 参加 AOYAKIDAN 女子美術大学版画研究室、今井しほか、
 齋藤雄介、佐々木耕太+中尾拓哉、ズンマチャンゴ、
 東京造形大学 黒板アートサークル、久村卓、三橋あかり



既存施設における最後の事業は、「つくる、かんじる、ふりかえる」の3つのテーマをもとに、「回想」を重ねることで「改装」へと期待が高まるイベントとしました。まずはカラフルなぼり旗で当館をぐるりと囲み、館内ではこれまでの活動の痕跡が残る建物そのものにフォーカスを当てた作品や、青焼き技法を用いた巨大な作品を展示しました。また、関係者へのインタビュー映像の上映や複数の工作プログラム、トークセッションなども行いました。過去と現在、そして未来が混在したアッサムブラージュ(寄せ集め)のようなイベントは、連日多くのにぎわいを見せ、集大成に相応しいフィナーレとなりました。



1. アートラボ正面
 2. 建物の周囲に設置されたのぼり旗(撮影:今井しほか)
 3. 外から見たアトリウムの展示
 4. エントランスに設置された看板

5. 過去の資料などの展示 / 6. 大きな黒板にメッセージを書く来館者 / 7. ズンマチャンゴ(パフォーマンズ集団)の映像、小道具、衣装などの展示
 8. 来館者が撮影した館内の写真と博物館実習生による展示案内のキャプション / 9. 過去のポスターや工作の展示とインタビュー動画の上映
 10. 東京造形大学の学生と小学生とで制作した黒板アート / 11. 廊下から見た大ギャラリー / 12-13. 女子美術大学の学生によるWS / 14. 事務室

ワークショップ/会議室

大学・学生

青でつながるエコバッグをつくらう!!

女子美術大学版画コースの3年生が青焼き技法を用いた作品展示とワークショップ(以下WS)を企画しました。学生が講師を務めたWSでは、思い出の宝ものを参加者が用意し、バッグに焼き付けました。今回、「無印良品 小田急町田」より廃棄予定の残布を提供していただいたため、それを利用した巨大な作品をつくり、会期後には店内にも作品の一部を展示させていただきました。



1



1-2. 学生によるWS / 3. 参加者の作品 / 4. 無印良品 小田急町田での展示風景



工作プログラム/大ギャラリー

大学・学生

みんなの図工室-2021-

三橋あかりさんが企画した図工室には、さまざまな道具や素材が用意され、参加者はそれらを自由に活用して工作を楽しみました。また会場にはプールやロール紙を広げたエリアを設けており、出来上がった工作を使ったオリジナルの遊びを見ることができました。

日時 | 令和3年7月30日(金)
~8月9日(月・振休)
企画 | 三橋あかり
(東京造形大学大学院
造形教育研究領域2年)



5-7. 工作を楽しむ参加者 / 8. 図工室全体



8

ワークショップ/エントランス

アーティスト

今井しほか

思い出のわたしに旗をふる

日時 | [のぼり旗WS (職員)] 令和3年6月21日(月)
[立ち寄り式工作] 令和3年7月30日(金)
~8月9日(月・振休)

企画 | 今井しほか



1



2



1. 旗をつくる参加者 / 2. 職員によるのぼり旗WS / 3. WSコーナーと旗の展示 (撮影:今井しほか)

コラム

アートラボはしもとから見える風景

今井しほか

令和3年8月、アートラボはしもとの外と館内では、たなびく色とりどりの旗が素晴らしい景色をつくっていました。

「アートラボはしもと改装閉館イベント」では、施設改装閉館という節目に合わせて、建物の内と外を囲む「旗」をつくるWSを行いました。

このWSには大きく2つのプログラムがあり、それぞれ異なるタイプの「旗」をつくりました。まず一つは実質的にアートラボはしもを支えている、市役所の職員やアートラボはしもとのスタッフとつくった17本ののぼり旗。もう一つは会期中に、来館者が会場で自由につくった150枚の小さな旗。どちらも制作者が自分の過去を振り返り、思い出を色や形に置き換えて自分の旗をつくるという内容でした。

ところで、本WSではなぜ「旗」を題材としたのでしょうか。

一言に「旗」と言ってもいろいろな種類がありますが、例えば国家や民族、団体を象徴するために一つの「旗」がつくられることを考えてみてください。私は、本来多くの人々を導くためのものとしてつくられた「旗」に集まるといことが、ときに多様な人々を一つに統制してしまうように感じることがありました。そしてそのような「旗」のあり方に以前から疑問を持っていました。

そこで今回のWSでは、さまざまな背景や歴史を持つ参加者たちが、それぞれの自分の「旗」と、それを自由に掲げられる場所をつくるということを構想してみました。

それは、一時閉館するアートラボはしもとも共通していると考えました。アートラボはしもと10年の歴史は、何か一つの答えを持つものではなく、そこに関わってきた職員や来館者たちの個人的な歴史が重なり、この場所をつくってきたものだと思います。そのようにして完成した幾多の「思い出の旗」が交わることで、2012年の開館から2021年までの10年間、

思い出を色や形に置き換えて旗をつくるWSです。市職員によるデザインを基にのぼり旗をつくり、これを当館の仮囲いに設置しました。また、会期中は来館者がその場で旗をつくるコーナーを設け、旗づくりとその展示を楽しんでいただきました。

アートラボはしもとがどのようなものであったのか、また、どのような景色をつくり出してきたのかを見せてくれると考えました。

アートラボはしもとは、初めて来館した人からすると専門的な美術施設というよりも、地域の人々が気ままに集う「文化センター」に近い印象を受けるのではないのでしょうか。今回のイベントでも、以前ここで展示をしたアーティストや美術大学の学生、子育て世代の家族、そして子どもたちなど幅広い層の人々が来館されていました。特に印象的だったのは、初めて来館した人でもいざ旗をつくり始めると真剣になり、大人も子どもも一緒になって楽しんでいる姿でした。美術の知識や経験に関わらず、同じ時間を過ごして旗をつくることで、普段はお互いに語る事のない思い出を語り合うことや、自分自身の背景を見つめることができたのではないかと感じています。これらの活動は、美術館やギャラリーとは異なる性質を持つアートラボはしもとだからこそ成し遂げられたものだと思います。

これからもアートラボはしもとが、地域の人々や職員、アーティストや鑑賞者、子どもや大人といった立場や世代に関係なく、それぞれの「旗」を自由に掲げられる場所であってほしいと願っています。



いまいしほか

1995年生まれ。2018年東京造形大学絵画専攻領域卒業。
現在、同大学で助手として勤務。
美術を通して小さな物語(個人)と大きな物語(歴史・文化など)を繋げることをテーマに、インスタレーションの制作やプロジェクトの企画をしている。

トークセッション/アートリビング **大学・学生**

つくって、みたら、ひろがった

ゲストが美術館や大学での活動を紹介しながら、美術における教育普及の役割とその可能性についてトークをしました。当日の様子は、相模原市公式チャンネル「文化芸術のひろば」でライブ配信し、会期中にアーカイブを公開しました。

日時 | 令和3年8月3日(火)14:00~15:30
 ゲスト | 小林貴史(東京造形大学教授)
 滝川おりえ(富山県美術館エデュケーター主任・学芸員)(オンライン出演)
 進行 | 加藤慶(当館学芸員)



コラム

トークセッションにおいて共有できたこと

小林貴史
 東京造形大学 教授

アートラボはしもとが、いよいよ現施設におけるラストイベントを迎えました。これまで地域や学校との連携活動において、学生たちの要望にも応えていただきながらさまざまな形で支えていただいていたことにあらためて感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、トークセッションを通して過去のWSを始めとした活動を振り返ってみると、アウトリーチも含めた拠点としての本施設は、柔軟な発想をもとに実に多様な活動を生み出してきただけが実感できます。そこにあるものをどのように活用するのか、今ある空間から何が発想されるのか、もとはモデルルームであった施設においては、あらかじめ用意された活動だけでは収まり切れない試行錯誤が求められました。このことは、活動をつくるということそのものに揺さぶりをかけてくる刺激として、常に新しいアートラボはしもとそのものを生成し続けてきたかのように感じます。

また、トークセッションでは富山県美術館エデュケーター主任・学芸員の

滝川おりえさんから美術館での多様な活動を紹介していただきました。富山県美術館(TAD)は、2017年8月にオープンした新しい施設です。アートとデザインの多くの収蔵作品とともに、ハード面とソフト面どちらも充実させることにより双方向でアートを体験することが可能となる活動を実践されています。このような富山県美術館の試みからも、教育普及の活動はそれを支える環境によって新たな可能性を広げていくことが確認できました。

これから新たにつくられるアートラボはしもとの施設においても、想定される活動を保証する機能とともに未知なる活動を認め、そこに関わる人たちの夢を実現する可能性を求めていくことを願っています。そして、魅力ある活動とともにそこから地域や人々をつなぐ新たなネットワークが生まれてくることを願っています。新生アートラボはしもとのスタートをみんなが楽しみに待っています。



2 1. 会場の様子 / 2. 配信された映像



こばやし・たかし
 東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。
 東京都立中学校、国立大学附属小学校教諭を経て現職。これまで、造形教育に関わる研究活動、ゼミナールの活動として地域社会と連携した造形WSの活動に取り組んできている。図画工作科教科書著者、平成29年改訂学習指導要領を始め文部科学省各種協力者を務めている。
 所属研究団体は、美術教育連合、大学美術教育学会、美術科教育学会、造形教育センター。

展示/作業場 **アーティスト** 齋藤雄介

Life goes on

当館で廃棄されるものを床一面に並べて、ステンシルを施し、車中から覗く雨の夜景に見立てた空間が演出されました。



展示/小ギャラリー **アーティスト** 久村卓

Mansion/Gallery、PLUS_red overall of curator K、PLUS_dark red tablecloth、Mansion/Gallery

台座や椅子など当館の備品を博物館実習生と運び出し、並べて空間を演出したほか、当館で使用した作業着やテーブルクロスに刺繍をした作品を展示しました。



制作の時間と空間をつくること 中尾拓哉 美術評論家

「マンション販売センター」を再利用した「アートのスペース」。それがアートラボはしもの魅力だった。人々が「新たな住まいを探すために訪れる仮施設」「新たなアートの拠点をつくるための仮施設」となったのである。そして、このたび約10年の活動を経て、アートラボはしものは建替えのために一度幕を下ろす。

アートラボはしもの施設はとても個性的であった。まずは、アートのスペースとして改修した「大ギャラリー」「小ギャラリー」と呼ばれる2つの展示スペース。小ギャラリーを抜けるとスクリーンで映像鑑賞ができる「シアター」があり、その先には6.3mの天井高で巨大なガラス壁から自然光が差し込む「アトリウム」と、同じ天井高で光を遮断し真っ暗にできる「スタジオ」があった。スタジオを出ると常設のアートスペースとして改修した、工作コーナーの「アトリビング」や壁全面を黒板にした「キッズアトリエ」が続く。2階に上がれば、黒のタイルカーペットの敷かれた「マルチスペース」とコンクリート床の「作業場」があった。何よりも「モデルルーム」が3室、当時のまま残されていて（私はこのモデルルームが大好きだった）、奥にはそこで販売されていたマンションを一望できるガラス張りの「ラウンジ」があったのだ。アートラボはしものは、このような「マンション販売センター」として使用されていた、本来、アートの展示スペースとして設計されていない場所をそのままに、そして部分的に改修を加えながら、さまざまなアートプロジェクトを実施してきたのである。

私はアートラボはしもの美術専門員として、2017年度から2020年度まで4年間勤めた。初来館は美術雑誌に展覧会評を掲載するための「SUPER OPEN STUDIO 2016」の取材だった。2013年から続く、相模原市に制作現場を構える総勢100名を超えるアーティストが、毎年共同してオープンスタジオを行うこのプロジェクトに驚きを覚えたことが、そのまま美術専門員への応募動機となった。2016年には美術評論家、2017年からは美術専門員として、S.O.S.に5年間関わり、毎年20軒を超える全てのスタジオを回ってきた。しかし、公開されるのは制作の時間のほんの一部でしかなく、一人ひとりのアーティストの制作は日々の生活へと広がっているのだ。相模原市とその周辺には4つの美術大学があり、そしてこの地域にはアーティストがたくさんいて、今も制作を続けている。私は本プロジェクトの意義は、そうした事実を社会に発信し続けていくこと自体にあると考える。

4年の間、女子美術大学、桜美林大学、多摩美術大学、東京造形大学の学生たちと共に展覧会、WS、トークイベントとさまざまな形でアートのあり方について模索してきた。なかでも記憶に残っているのは、2018年2月に開催された桜美林大学の卒業研究選抜作品展「基点と起点VI」である。すでに大学内で行われていた卒業展とは異なる趣向で、アートラボはしもとで再展示を行ったのだ。モデルルームのベランダが見えるアトリウムには「大きな木」「アパレルショップ」「街のジオラマ」などの作品を展示。シアターでは「映画」、スタジオでは「漫画・アニメ」、

大・小ギャラリーでは各テーマに合わせた作品を集め、そしてエントランスでは学生が大きなボックスを制作して演劇やコンサートを開いた。子ども向けと高齢者向けのWSも開催し、大学内の展示とは全く違う形で、まるでひとつの街のあり方のように展覧会が再構成されたのである。こうした学生たちの着目の背景には、アートラボはしもの市民に開かれた活動の影響だけでなく、この場所がかつて「マンション販売センター」だったという建物の潜在的な力があつたに違いない。

また2020年度、コロナ禍で多くの事業が中止になるなかで、1階の一部に「アトリビング」という常設の工作コーナーを設置した。いつでも気軽に来館者がものづくりに触れることができるように「リビング」という名前を入れた。1年を通じてシュルレアリスムの技法である「コラージュ」のさまざまな側面を紹介し、さらに「デカルコマニー」「フロッタージュ」を加えた3つのWSを開催した。何かをつくることは、友達との待ち合わせの合間でも、雨宿りの合間でも、買い物の帰り道でも、暇な時間、特に理由のない時間であってもいいはずだ。コロナ禍で静かに制作する来館者と、とんとん壁に貼られていく作品を見て、ものをつくる時間の大切さを改めて感じることもできた。

名残惜しいこの施設での思い出を挙げればきりがながい、思えば私が初めて担当したのは建物の外にある花壇を使って親子で野菜を育てる「みんなの畑プロジェクト」であった。野菜づくりとアートを結びつけたこの企画では、畑の看板、土、野菜の葉、20種を超える収穫物、全てが

アートの対象となった。だが、むしろ私の記憶に残っているのは、間引きや追肥、風や病気から野菜を守ること、そしてWSのない週に野菜が熟さないでくれと祈ることであった。と、そう懸命に準備したWSでの、あの親子の笑顔。小さな大地を通じた工作はきっと市民の皆さまの記憶に残っていると信じたい。制作の時間は、短いようで長く、ささやかなようでいつまでも忘れられなかったりする。

建物が変わるということは、そこで起こることに根本的な影響を与えるだろう。しかし、この「マンション販売センター」の建物に仮住まいのままではいられない。この地にアートを根づかせることができるかどうかは「住まい」を完成させたアートラボはしもの役目なのだから。



なかお・たくや

1981年生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。芸術博士。アートラボはしものと美術専門員時代は「SUPER OPEN STUDIO」を担当し、書籍『S.O.S. BOOK』を編集(2017年～現在も毎年出版継続中)。著書に『マルセル・デュシャンとチェス』(平凡社、2017年)。編著書に『スポーツ/アート』(森話社、2020年)。現在、女子美術大学、多摩美術大学、東京藝術大学、東京工業大学、立教大学非常勤講師。

Some or Same

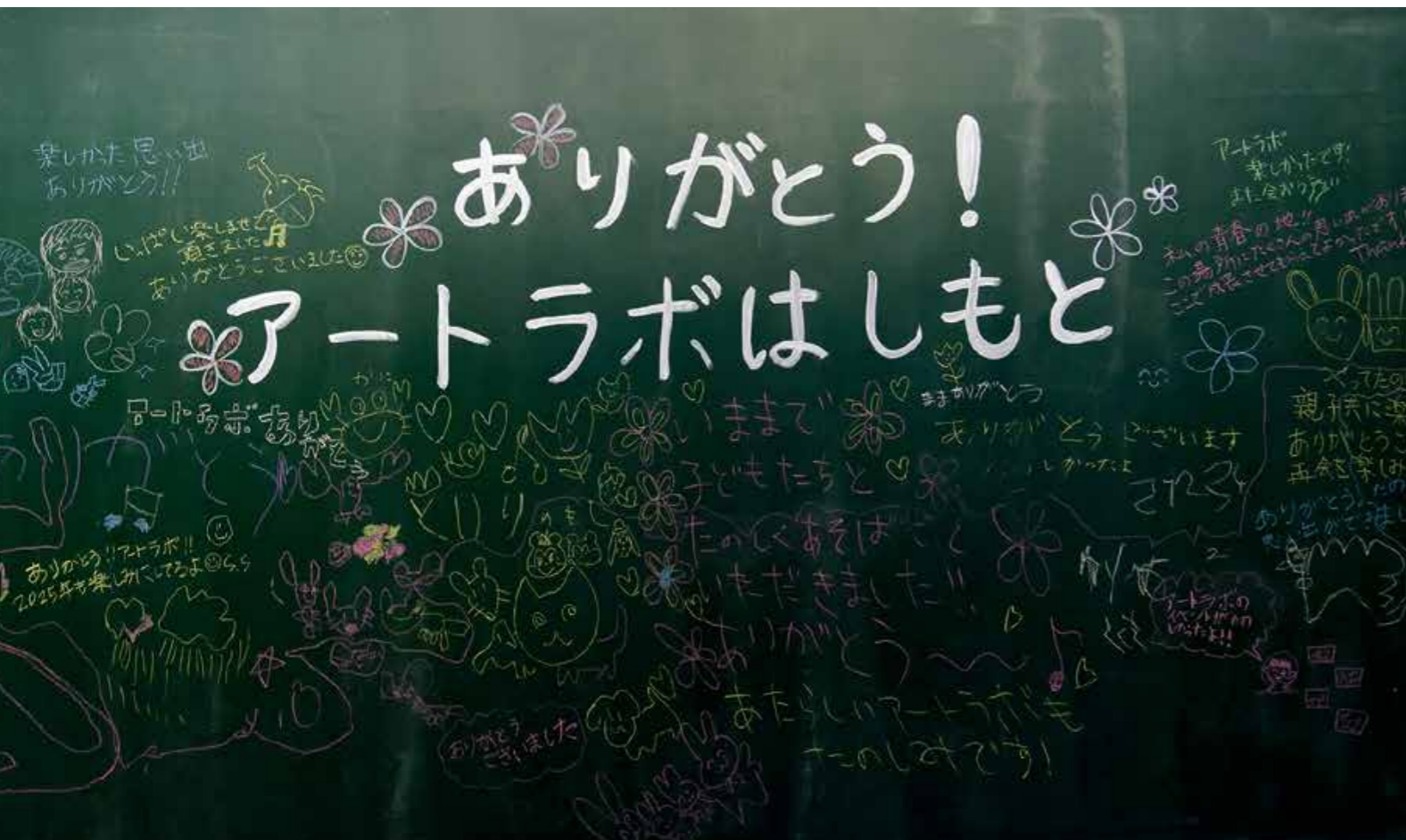
「アートラボはしもと改装閉館イベント」では、「S.O.S. 2019」で行った当館のモデルルームを活かした展覧会「Some or Same」を再展示し、新たに4つの環境音が切り替わり流れる作品を追加。エントランスと外壁には当館の間取りをモチーフにした新作を設置しました。



1-3.「アートラボはしもと改装閉館イベント/2021」での「Some or Same」展示風景



1.「S.O.S. 2018」でのパステアワー/2-3.「基点と起点VI/2018」展示風景/4.「アトリビング/2020」での工作/5.「みんなの畑プロジェクト/2017」



アートラボはしもと 再整備について

アートラボはしもと 所長 松島政幸

平成24年、アートラボはしもとは寄贈された民間施設を活用した“アートの活動拠点”として開館しました。以来、多種多様なアートプログラムを館内外で展開し、アートによる先進的・実験的な取り組みを進めてきましたが、もともと仮設の建物であったため、近年、設備などの老朽化がみられていました。

当館の再整備については、平成28年度の「相模原市美術館基本構想」において先行整備が位置付けられ、その後、民間活力導入の可能性を検討する「サウンディング型市場調査」の実施や、「相模原市橋本地区における美術施設の整備に関する検討委員会」の設置・建議など、さまざまな検討を進めてきました。

その結果、民間活力の導入により財政負担の軽減を図りつつ、官民の連携による相乗効果を狙い、アートを通じたコミュニティの形成やまちのにぎわいづくりを推進することを目指すため、当館の後継施設と民間施設の併設による複合的整備を実施することとなりました。

後継施設は、橋本地区の特徴を踏まえるとともに、現行の教育・普及に特化した施設の特性を継承し、ここで展開されるアートプログラムにより、より活発な交流が生まれる美術施設として整備いたします。開館までにはまだ数年の期間を要しますが、完成後の新生「アートラボはしもと」にどうぞご期待ください。

アートラボはしもと 再整備に向けた取り組み

- 2008.02** 相模原市美術館検討委員会設置
- 2009.03** 「相模原市の美術館にかかる提言書」提出
- 2011.03** 4大学とアートラボはしもとに関する基本協定締結
- 2012.04** 開館
- 2016.05** 相模原市美術館基本構想策定
- 2018.04** 相模原市橋本地区における美術施設の整備に関する検討委員会設置
- 2019.01** 事業評価の実施
- 2019.10** 「アートラボはしもと後継施設の整備に係る建議書」提出
- 2021.08** 施設閉館／事務所移転
- 2022.03** 再整備事業に係る民間事業者公募

インタビュー

アートラボはしもとの これまでとこれから

当館開設当初から運営に携わってきた柳川・加藤の二人の職員にインタビューをしました。これまでの活動を振り返るとともに、再整備後のアートラボはしもとへの思いもお聞きしました。
聞き手：入江彩美（当館美術専門員）

設立のきっかけ

入江：まず、アートラボはしもと（以下アートラボ）設立のきっかけについて教えてください。

柳川：アートラボは行政や美術の現場、大学や商店街の課題などに対し、その解決に向けてさまざまなタイミングがピタッと合ってきたものなんです。

まず、行政の課題として美術館整備の課題がありました。相模原市では以前より美術館整備を検討していましたが、そんな時に民間事業者が橋本の土地3660㎡を美術館用地として寄贈してくれることになりました。そこで「相模原市美術館検討委員会」を設け、どのような美術館が本市にはふさわしいのかを検討し始めます。そして翌年に提出された「提言書」では、美大生が多い橋本の地域性を活かした、“人・場・市民文化を育む美術館”、“まちづくり機能をもつ美術館”が必要と提言されました。また、それを検討するなかで、美術館整備までの間、この土地を有効活用した方がよいのではないか、機運を高めるためのプレ活動が必要ではないか、など新たな課題も生まれてきました。これらが行政サイドの課題です。

次に現場サイドの課題です。当時、僕らがいた相模原市民ギャラリーでは、学生たちが1年がかりで企画し、実践する通称「学生企画展」という長期型のWSを行っていました。加藤さんはその第1期生です。展覧会を開催するまでに数十回もの打ち合わせが必要となりますが、市民ギャラリーは貸館なので部屋の予約が取れなかったり、また展示作業にも時間がかけられなかったりと、不自由さを感じていました。学生たちの活動は人々の注目を浴びていたし、やる気もあるので、もう少し余裕をもって活動できる方法はないのか。それが現場サイドの課題でした。



1. アートラボはしもとに関する基本協定締結式 / 2012
2. 学生企画展の会議をする学生 / 2012



加藤 慶 2012～2015年アートラボはしもと美術専門員。2017年～アートラボはしもと学芸員。
柳川 雅史 2009年～アートラボはしもとの開設に携わる。2012～2016年アートラボはしもと所長。2017～2021年アートラボはしもと学芸員（再任用）。2022年～アートラボはしもと美術専門員。



ほかには、大学や近隣の商店街からの声もありました。近年、大学では、学生たちが地域住民と触れ合うカリキュラムが増えていきます。しかし、そのためには地域に住民と触れ合う場が必要です。どこかにそのような場所がないのか。大学は校外に学生が活躍できる場を求めています。

また現在、橋本はリニア中央新幹線神奈川県駅（仮）の工事が進んでいますが、当時はまだその計画は動いておらず、商店街では特色づくりの方法を模索していました。僕らは以前からこの街を「美大生の街」にすれば面白いと考えていたので、これを商店街の方に提案してみました。その提案に理解は示していただけましたが、そのために美大生と商店街をつなぐ受け皿を市で用意してほしいという声が上がりました。

そういった課題などにどうにか対応できないかと思っていた時に、文化振興課の職員から、美術館予定地にあるマンション販売センターを撤去する前にその建物で学生のイベントができないかと言われました。さっそく見に行くとなかなか面白い構造の建物で、ここでならそれぞれの課題に対応した活動ができるかもしれないとひらめきました。そこで、この建物を再利用し、美術館整備までの間、プレ施設として活用しようというアイデアが生まれます。

入江：それぞれの課題を一挙に担うことがアートラボの設立に結び付いたんですね。

柳川：そうです。そして、さっそく庁内で検討を始めるのですが、オープンまでの3年間で庁内や大学などとの打ち合わせは70～

80回にもおよび、激しい議論になることもしばしば。白紙に戻されたこともあり。自分は当然のことながら、当時の部長や課長、担当職員は相当頑張ったと思いますよ。

入江:それは、建物の位置付けや大学との関係など未知数の課題が多かったからですか？

柳川:とにかく前例がないことが多かったからというのがあります。結局、建物は庁舎の一部という位置付けになり、美術館整備までの間、暫定的に市が直営で運営することになりました。また、予算や職員は課内で調整し、さらに敷地内の空を民間企業に貸し出して賃借料を得るなど、知恵も働かせました。そして、女子美術大学・桜美林大学・多摩美術大学・東京造形大学との間で「アートラボはしもとに関する基本協定」を締結し、それらの大学からの「提言書」では「まちづくり」を重要なキーワードとしていたので、活動内容はそれを意識したものになりました。アートラボの設置目的は、まちなかで先進的・実験的な活動をしなが、美術館整備に向けて経験を蓄積していくことでした。

入江:アートラボの活動を通じて、どんな美術館ができるのか市民に伝えていこうということだったのですよね。

柳川:そうです。さまざまな課題があり、それを解決するための材料がそろい、また、そういうことを考え実践する職員、理解し協力してくれた大学の教授や事務職員、議員や街の人々、さらに英断を下していただいた市長や学長がいたからこそ出来上がった奇跡の物語なのです。

オープンしてからの苦労

入江:オープンしてからはどのような苦労がありましたか？

加藤:正直、最初は建物があるだけで、機能や設備は何もなかったですよね。

柳川:建物だけは手に入れたけど、予算も人も最小限。みんなで考えたことが果たしてできるのか。今だから言えますがあまりにも不安材料が多く、空っぽの部屋で一人涙したこともあります。何しろ床とか壁とか学生と一緒に手づくりで改修しましたからね。

加藤:ただ、ゼロから自分たちで考えていく業務は楽しかったです。初年度は、学生企画展などいくつか事業は決まっていたのですが、あとは自分たちでできることを考えたり、学生発案の企画などを実施したりしました。試しながらやってみて、次は何ができるかの繰り返しでしたが、試作実験や準備の期間が長くとれるのはいいところでした。学生やアーティストのライフスタイルに合わせて対応したことで、じっくり現場で考えて、やりたいことを実践できました。

柳川:建物自体が面白かったこともよかったです。モデルルームや真っ暗になるスタジオなどがありましたから。ただのホワイトキューブだったらそんなに盛り上がりませんでしたよ。

入江:市民に施設を楽しんでもらうために工夫したことはありますか？

加藤:あの建物に市民が入りやすいかという点と実際は難しく、当初は市民の理解を得ることに苦労しました。

柳川:それまで民間の建物でしたから、アートラボが地域に馴染むまでは市民は入りづらかったようです。

加藤:あと、ここで主に活動しているのは学生やアーティストです。特に学生は授業があるので、アートラボで活動できるのが午後5時以降になります。初めは学生の活動風景を市民に見ていただけと思っていましたが、午後5時以降では市民は来ません。それぞれの活動時間が違うので、そのアナウンスが難しかったです。

柳川:常設の展示がないので、空っぽに見えることもありました。裏ではずっと会議とか制作作業をしてもそれは市民には見えませんからね。

加藤:そこで、黒板スペースや自由に工作するアトリビングを設けるなど市民にも施設を利用してもらうための工夫はいろいろしてきました。

柳川:それによってだんだん居つき子が出てきました。常連の加藤ファンとか(笑)

入江:できることから少しずつ始めていったのですね。

印象に残っている事業

入江:特に印象に残っている事業は何ですか？

柳川:ロータリークラブや商店街の方たちが協力してくれた事業は思い入れがあります。和菓子屋さんやお医者さんが講師になったWSとか。WSの経験がない地域の方が講師側になるというのは面白い試みだったんじゃないでしょうか。

加藤:やっただけではなく、一緒にやりましょう、みたいなのが面白かったですね。

柳川:その方たちの技術や知識をどう活かそうかというところを一緒に考えました。また、講師を務めてくれた方はこちらの理解者となり、その後もいろいろと協力してくれました。



3. アートラボはしもと 春のプログラム 開講!ぼくらの未来授業 /2016



加藤:和菓子屋さんなど講師を務めた方の中には、後に自分たちで企画して、他のイベントでWSを実施したということもありました。

入江:次につながって応用されていったのですね。

柳川:僕は、地域の方々が自分たちで楽しみながら発展していくためのヒントや体験を与えただけです。しかし、そういうことが僕らにできる「まちづくり」だと思いました。

加藤:「S.O.S.」(2013年～)も最初の発案はアートラボでしたが、その後はアーティストたちが自発的に活動しています。そして、私たちには思いもつかないような独自の企画が多数生まれています。

柳川:自分自身が企画したプログラムでは「アートな覆面レスラーになろう」(2014年)が印象的です。こんなどこでもやっていないし僕しか考えない(笑)。これも地元のプロレスラーの協力をいただきました。「さがみはらフェスタ」や「造形さがみ風っ子展」など野外イベントで巨大な作品をつくったことも忘れられません。大変苦労しましたから(笑)

加藤:僕は、オープニングの「思い出アニメーション」(2012年)や、最後に飾った今井さんのプログラム(p.6)などアーティストや学生と一緒に打ち合わせを重ねてつくっていったプログラムは、どれも面白かったです。他には、JAXAの協力を得て実施した事業など、異業種との連携のなかでその専門性の話を聞くのは大きな刺激になりました。桜美林大学との演劇のプログラムでは、場のつくり方や実施までの進行など学生から教わるが多かったです。



4. アートラボはしもと × 桜美林大学 × 橋本図書館 連携事業 真夏の忍者修行～おひめさまを救出せよ!～の巻 /2017 / 5. アートな覆面レスラーになろう /2014
6. 第8期学生企画展 Art Program Run! 学生企画による学生作家の展覧会「たつまきエメラルド～アートと魔法が世界を変える～」/2014

柳川:それぞれの大学が企画したプログラムはどれも楽しいものでした。アトリウムの巨大なガラス窓全面を彩った作品とか学生のミュージカルとか。『学生企画展』もアートラボの活動をよく表す事業でした。アートを通して食卓をワクワクするものに変えることをコンセプトにした「ごはんのおとも展」(2013年)とか“魔法の世界”をキーワードに大規模なインスタレーションの展示やさまざまなWSを行った「たつまきエメラルド」(2014年)とか。また、児童クラブや福祉施設にもよく出かけましたね。

再整備後の「アートラボはしもと」

入江:新たに生まれ変わる「アートラボはしもと」はどのようなものになるのですか？

加藤:これまでは美術館整備のための暫定的な施設でしたが、新しいアートラボはその前提がなくなることは大きいと考えます。そのなかでどのように企画を行い発信していくかを考えていかなければなりません。また、さまざまな人と一緒にプロジェクトを進めていくなかで、ときには衝突が生まれることもあると思います。そのときに、対話ができるような場を用意することも必要です。

柳川:あと、アートボらしさをどう出していくかが一番の問題となります。この濃厚さや密度みたいなものを新しい施設でも出せるのか否か。失敗や反省も含め、さまざまな挑戦が必要となるでしょう。

加藤:再整備後は、主催者側がこれをやりますと言い切らないで、みんなで考え、育てていける余白を空けておきたいです。企画側も参加者側もあそこは“あそび”があるからやってみよう、と思ってもらえる、より活発な交流が生まれると思います。そのときに複合施設の民間事業者とどう連携していくかもひとつのキーとなると考えます。新しい「アートラボはしもと」の試みを楽しみにしていただければと思います。



SUPER OPEN STUDIO 2021 関連企画

HELLO STUDIO

久しぶりに、スタジオに行ってみました。

期間 | 令和4年3月26日(土)～
形式 | オンライン
主催 | HELLO STUDIO 実行委員会
(Super Open Studio NETWORK・アートラボはしもと)
共催 | アートラボはしもと(相模原市)

HELLO STUDIOは、2013年から毎年行っている「S.O.S.」の関連事業として実施された、オンデマンドのコンテンツ配信企画です。実行委員によるスタジオ訪問の動画と、アーティストがスタジオの様子を撮影した写真を特設サイトで公開しました。

※本市および近隣地域には、多くのアーティストが倉庫や廃工場を改装したスタジオ(制作場所)で作品制作を行っています。このエリアに集まるスタジオを一斉に公開するプロジェクトが「SUPER OPEN STUDIO(S.O.S.)」です。



HELLO STUDIO 特設サイト

HELLO COMRADE

吉岡知秋がゲストの高木大地とともに3つのスタジオを訪問し、オープンスタジオの様子や、スタジオで制作するアーティストと作品についてじっくりと話し合う姿を収録しました。

企画・出演 | 吉岡知秋(pimp studio)
出演 | ゲスト：高木大地

- 1.LUCKY HAPPY STUDIO訪問(16分56秒)
- 2.REV訪問&対談(26分41秒)
- 3-4.pimp studio対談(33分18秒)

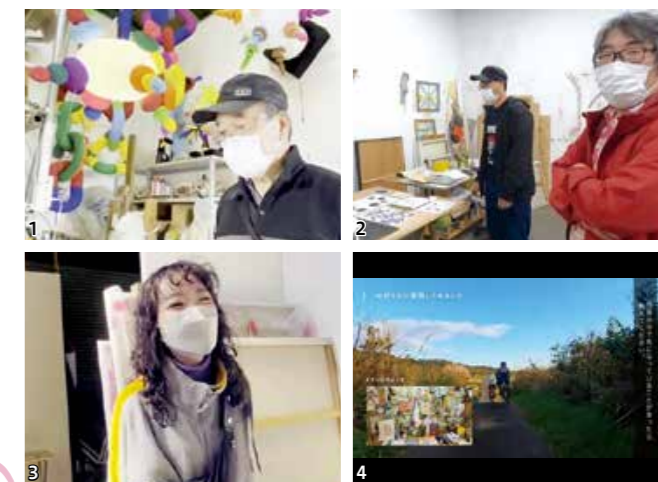


ちょっと ちゃんと スタジオ

自転車やバスなど、さまざまな方法でスタジオに移動するアーティストに同行し、作品制作のことや、日ごろ考えていること、オープンスタジオのことなどについて話しながらスタジオに向かいました。

企画・出演 | 入江彩美(当館美術専門員)
出演 | 尾山久之助(ESA)
大槻英世(STUDIO 牛小屋)、ゲスト：吉田和貴
石山未来(studio kelcova)
内田望、中村萌(クストハウス)

- 1.尾山さんといっしょにESA 編(15分43秒)
- 2.大槻さんと吉田さんといっしょにSTUDIO 牛小屋 編(22分56秒)
- 3.石山さんといっしょにstudio kelcova 編(20分46秒)
- 4.内田さんと中村さんといっしょにクストハウス 編(19分46秒)



S.O.S. BOOK 2021

S.O.S.に参加する20軒のスタジオにレンズ付きフィルム「写ルンです」を配布し、「制作と日常」をテーマに、普段の様子や制作現場を撮影した写真を特設サイトで公開しました。『S.O.S. BOOK 2021』は、右のQRコードからご覧いただけます。

企画・編集 | 中尾拓哉、高橋ひかり
参加スタジオ | pimp studio/LUCKY HAPPY STUDIO/STUDIO ISSEI/ゲルオルタナ/studio kelcova/アトリエボイス/Studio HAUSU/STACK ROOM/RED IRON STUDIO/モゲスタ Moge Studio/クストハウス/ESA/STUDIO 牛小屋/REV/TANA Studio/アトリエ 481/STUDIO カタクリコ/STUDIO VOLTA/RMP/studio ban/SPECIAL FEELING STUDIO



『S.O.S. BOOK 2021』トップページ



『S.O.S. BOOK 2021』はこちらから

【スタジオ訪問】ハースー行ってみた!【with ルカっち】【レッドアイアンも?!】

鈴木飛馬と畠中瑠夏が、今年S.O.S.に初参加するStudio HAUSUのメンバーとお互いのスタジオを歩き、スタジオの環境や制作した作品について話しました。

企画・出演 | 鈴木飛馬(RED IRON STUDIO)
出演 | 畠中瑠夏(RED IRON STUDIO)
上田哲也、長嶺高文、吉田裕亮、伊澤侑里恵(Studio HAUSU)

- 1-2.Studio HAUSU(20分45秒)
- 3-4.RED IRON STUDIO(25分36秒)



Studio Documentary

仁禮洋志が、S.O.S. NETWORKに所属するスタジオを訪れ、アーティストへのインタビューや普段のスタジオの様子を撮影したドキュメンタリー映像です。

企画・撮影 | 仁禮洋志(相原スタジオ)
出演 | 久保田恵美、清水優、本多絵美子、吉原宏紀(アトリエ 481)/栗原一成、小林丈人、田中良太、明定由香里(STUDIO ISSEI/ゲルオルタナ)/堀江和真、丸山幸(アトリエボイス)

- 1-2.STUDIO ISSEI/ゲルオルタナ(17分20秒)
- 3.アトリエボイス(9分25秒)
- 4.アトリエ 481(25分31秒)



2021年度事業一覧

アートラボが主催する事業 | 市内施設・団体との連携事業、市内の催しへの出張WSなど | 地域アーティストなどとの連携事業 | 小学校や児童クラブとの連携事業による出張WSや団体受入

事業名	会期	来場数	分類	プログラム名	実施日	参加数	講師など	詳細		
アートリビング・シュールな実験室-	2021/4/1～5/4	-	工作	コラージュ	2021/4/1～5/4	26	当館美術専門員	-		
市立図書館・アートラボはしもと連携事業「つくっちゃおう かみしばい!第6幕」成果展示	2021/4/29～5/9	227	展示	実演映像	2021/4/29～5/9	-	-	-		
アートラボはしもとワークショップデザインプログラム「ラボックス」プログラム成果報告展示	2021/5/15～5/30	292	展示	作品展示、プログラム紹介映像	2021/5/15～5/30	-	小寺美卯、大河翔、鈴木晴絵、三橋あかり、ヨウ エンヒ	-		
			立ち寄りWS	君も作品の一部!? 作ろう!入ろう!ビッグボックスアート!!			三橋あかり	-		
			立ち寄りWS	かいじゅうスケッチにチャレンジ!!			8	大河翔	-	
WS	画材を作る。描く/遊ぶに手間加えてみよう	7	小寺美卯	-						
アートラボはしもと改装閉館イベント～これから始めるリニューアル～	2021/7/30～8/9	838	展示	作品展示、資料展示	2021/7/30～8/9	-	AOYAKIDAN 女子美術大学版画研究室、齋藤雄介、佐々木耕太+中尾拓哉、Super Open Studio NETWORK、ズンマチャンゴ、久村卓、東京造形大学 黒板アートサークル	3-4、8-11		
			展示	関係者インタビュー映像			生嶋順理、生嶋なぎ、磯野玲奈、伊藤隆夫、大森裕、岡本なお子ほか4人、北村綾、倉持清香、佐竹宏樹、鈴木正彦、千葉敏子、中尾拓哉、古橋裕一、本多ちかこ、ミヤマ仮面・クワガタ忍者、森脇裕之、沼下桂子、山根一晃、山本実、山本浩史、米山肇	-		
			工作	みんなの図工室-2021-			240	三橋あかり、博物館学芸員実習生	5	
			工作	思い出のわたしに旗をふる			164	今井しほか	6	
			WS	ラボでカシカカマラマン			33	当館美術専門員、博物館学芸員実習生	-	
			WS	青でつながるエコバッグをつくろう!!			2021/8/1・7・9	48	AOYAKIDAN 女子美術大学版画研究室	5
			トークライブ配信	<トークセッション> つくって、みたら、ひろがった			2021/8/3	26	小林貴史、滝川おりえ、当館学芸員	7
WS	<関連ワークショップ>思い出のわたしに旗をふる	2021/6/21	17	今井しほか	6					
アートラボはしもと×けやき体育館コラボイベント「ポッチャボールを作ってみよう!」	2022/1/16	-	WS	アートラボはしもと×けやき体育館 コラボイベント「ポッチャボールを作ってみよう!」	2022/1/16	10	けやき体育館職員、ボランティア、当館学芸員、当館美術専門員	17		
市立図書館・アートラボはしもと連携事業「つくっちゃおう かみしばい!第7幕」	2022/2/19・26	-	オンラインWS	紙芝居ワークショップ	2022/2/19・26	10	本多ちかこ	17		
	2022/3/5	10	実演	紙芝居実演	2022/3/5	4	-	-		
SUPER OPEN STUDIO 2021 関連企画 HELLO STUDIO	2022/3/26～	※2 1,878	録画配信	【スタジオ訪問】ハースー行ってみた!【withルカっち】【レッドアイアンも?!】	2022/3/26～	-	井澤有里恵、上田哲也、鈴木飛馬、長嶺高文、島中瑠夏、吉田裕亮	-		
			録画配信	Studio Documentary			明定由香里、久保田恵美、栗原一成、小林丈人、清水優、田中良太、仁禮洋志、堀江和真、本多絵美子、丸山零、吉原宏紀	-		
			録画配信	HELLO COMRADE			高木大地、吉岡知秋、LUCKY HAPPY STUDIO、pimp studio、REV	-		
ウェブ写真集	ちょっと ちゃっと スタジオ	石山未来、内田望、大槻英世、尾山久之助、中村萌、吉田和貴、当館美術専門員	15-16							
旭小学校出張授業	2021/11/15・29	-	その他	アートラボはしもと活動紹介 水彩絵具を使用した「にじみ表現」について	2021/11/15・29	84	当館学芸員、当館美術専門員	17		
				児童クラブ 定期ワークショップ			-	-	WS	発見!みんなのおおきなさん キラキラな雪の結晶をつくろう!
令和3年度博物館学芸員実習	2021/7/3～8/15	-	その他	「アートラボはしもと改装閉館イベント～これから始めるリニューアル～」関連プログラムの補助など	2021/7/3～8/15	16	当館学芸員、当館美術専門員	17		
女子美術大学出張授業	-	-	その他	「公共学習ゼミ 版の展開」アートプログラムについての意見交換会	2021/4/22	27	当館学芸員	17		
東京造形大学オンライン講義	-	-	その他	「造形教育研究II」社会教育における造形活動としてアートラボの事例紹介	2021/10/21	10	当館学芸員	17		
女子美術大学オンライン講義	-	-	その他	「PROJECT DISPLACED 2021:STATIC REVERB」SUPER OPEN STUDIO などの事例紹介	2021/10/22	30	当館学芸員	17		
女子美術大学出張授業	-	-	その他	「アートラボはしもとのミッション」アートラボはしもとの活動内容、アートプロジェクトの紹介	2021/11/26	118	当館学芸員	17		
多摩美術大学出張授業	-	-	その他	「アーティスト・クリエイターを目指すあなたへ卒業後のライフサイクルを整えてみる」	2022/1/15	8	当館学芸員	17		
その他	2021/4/23～7/8	1,479	展示	「ミヤマ仮面とつくって遊ぼう!!」工作紹介展示	2021/4/23～7/8	-	当館学芸員	-		
	2021/4/20～	※3 402	録画配信	工作紹介動画「ミヤマ仮面とつくって遊ぼう!!」	2021/4/20～	-	当館学芸員	-		
	2021/4/13～5/9	497	その他	「東京2020公式アートポスター」の紹介	2021/4/13～5/9	-	-	-		
WS	<さがまちカレッジ>2021年度こども体験講座『黒板に絵をかいてみよう～黒板アートワークショップ～』	2021/7/24	10	東京造形大学 黒板アートサークル	-					
展覧会等 来場者数計		5,636	プログラム 参加者数計		1,089					

※1,2 オンライン観覧総数 ※2 2022年4月26日時点 ※3 2021年8月3日時点

大学・学生

博物館学芸員実習生受け入れ

期間 | 令和3年7月3日(土)～8月15日(日)
会場 | アートラボはしもと
主催 | アートラボはしもと(相模原市)

今年度は、6つの大学から16名の実習生を受け入れました。改装閉館イベント(p.3-11)では、アーティストや職員とともに会場準備から会期中の運営補助まで、案内などの実践を通して意欲的に取り組んでいました。



大学・学生

児童クラブ定期ワークショップ

- ①発見!みんなのおおきなさん
日時 | 令和3年12月1日(水)15:00～16:00
会場 | 旭児童クラブ
主催 | アートラボはしもと(相模原市)
企画 | 東京造形大学小林貴史ゼミナール
- ②キラキラな雪の結晶をつくろう!
日時 | 令和4年1月28日(金)・31日(月)16:00～
会場 | 小山児童クラブ
主催 | アートラボはしもと(相模原市)

魚の骨の化石を模したキットから元の姿を想像して粘土などで肉付けしていくWSや、雪の結晶の「シメトリ」をテーマに、切り紙やシールを組み合わせてオリジナルの飾りをつくるWSを行いました。



「発見!みんなのおおきなさん」

大学・学生

出張授業

市内の小中学校で絵の具の「にじみ」という技法を紹介し、その技法を用いて紅葉した山などを描く授業を行いました。また、市内外の大学に出向き、学芸員の仕事や社会におけるアートの役割などについて講義を行いました。
出張先:旭小学校、女子美術大学、多摩美術大学、東京造形大学



旭小学校出張授業風景

地域 | アートラボはしもと × けやき体育館コラボイベント

ポッチャボールを作ってみよう!

日時 | 令和4年1月16日(日)10:00～11:30、13:30～15:00
会場 | 相模原市立けやき体育館
主催 | 相模原市立けやき体育館
協力 | アートラボはしもと(相模原市)

相模原市社会福祉事業団との連携事業です。けやき体育館内で球技「ポッチャ」のボールを自分で作り、試合に臨みました。聖火台やメダル授与、応援団など楽しむための演出にもこだわりました。



地域 | 市立図書館・アートラボはしもと連携事業

つくっちゃおう かみしばい!第7幕

日時 | [制作]令和4年2月19日(土)・26日(土)
[発表・撮影]令和4年3月5日(土) 各回10:00～12:30
会場 | [制作]オンライン
[発表・撮影]相模原市立青少年学習センター
講師 | 本多ちかこ
主催 | 相模原市立図書館・アートラボはしもと(相模原市)

子どもたちが自分で考えた物語を紙芝居にして発表する市立図書館との連携WSです。オンラインでつくり方を教わり、完成した紙芝居をご家族の前で発表して動画公開のための撮影も行いました。



地域

マッチング事業

市民や企業から壁画の制作者や講師の依頼、制作場所探しなどの相談を受け、実現に向けた調整を行いました。案件には、当館との連携事業に至るケースもあります。



仮囲いイメージアッププロジェクトにおける美術大学と企業とのマッチング事例